

ピア

ネットワークの縁から未来をデザインする方法

【目次】

はじめに ゆるやかな進歩を見逃すな

7

進歩はどこから生まれるのか？／多数の知との共同作業／新しいタイプの活動家と企業家の登場

第I部 解決策はピア・ネットワークから

31

ルグランの星／インターネットと民主制／ポジティブな逸脱者／キックスターターの成功／ウエブの贈与経済／大事なのは社会的アーキテクチャーだ／進むべき道を見つける

第II部 社会の仕組みを変える方法

79

コミュニティ

80

コミュニティの問題は、コミュニティで解決する

ダイヤル311／大都市に小さな町の文化を／ささやかな情報が最重要なわけ

ジャーナリズム

99

多様性を高めれば、社会はもっと賢くなる

ポットホール・パラボックス／ウエブ上の老生林／大手では採算がとれなくても／情報生産性のモデル／ケルアックの群れ

テクノロジー

127

情報をコントロールする力を広げる

サイバー・ユートピアとテロリスト／形態を変える力／矛盾した願望

インセンティブ

144

グッドアイデアは、ネットワークの縁<sup>エッジ</sup>から生まれる

懸賞コンテストの大成功／特許とアイデアの共有／医薬品に賞金を与えよう／  
Challenge.gov の開設／「教育を成功させる秘訣」を募る／Xプライズとコー  
ヒーハウス

デモクラシー

168

## リキッド・デモクラシーが政治を動かす

市民が予算編成に参加する／民主制バウチャー／直接民主制のよさを活かして  
／リキッド・デモクラシーへ

企業

191

## 次の成長は、ピア・ネットワークな企業が実現する

意識の高い資本主義／従業員が企業を所有する／教師も学校の株主に／フエイ  
スブックの矛盾

結論

## 別の社会を想像すること

209

ウィキペディアの停止<sup>フラックアウト</sup>／持続的な進歩／人間の心に響くもの／参加、平等、

多様性

謝辞  
224

注  
(1)

解説  
234

本書は、変革&イノベーションを進めるための手引き書だ。その担い手は一握りの優れた企業家や活動家などではない。私たちのだれもが、その変革に参加し進めていくことができる。私たちは長いこと、大きな力を持つ少数の組織・人々とその下にある多くの組織・人々という構図に慣れ親しんできた。政治・経済を始め、社会の隅々にまで、そんな仕組みや発想が根づいている。とはいえ、とりわけインターネットの進展によって、こうした既存のシステム（本書では「ルグランの星」型と呼ばれる）の変容が、身近に感じられるようになってきた。階層的な関係にとらわれない、オープンで対等・協働的なつながりがモノゴトを動かしていくさまを今や私たちは目撃している。そう、ウィキペディアやクラウドファンディングから、フェイスブックやツイッターを活用した変革の嵐（「アラブの春」や「ウォール街を占拠せよ」など）まで——だが、実のところ、その力はいったい何なのか？ 本書は、この動向の核心をとらえることによって、私たち自身が変革&イノベーションを起こす仕組み作りを提案する。

もともと、インターネットの設計上の特色は、「ピア P E E R」なことだった。「ピア」とは、「対等な者」「仲間」という意味だ。一極に集中しない分散的なネットワークであり、それぞれは対等な仲間のような関係によってつながっている（この構造は、「ピアツーピア P2P」と呼ばれる）。もつとも、こうしたつながりはインターネットによって初めて興ったわけではない。かつての交易都市や、さらに遡れば旧石器時代の共同体にもあつた始原的な（だからこそ人々の心に響く）ものなのだ。そして、画一性や普遍性ではなく、固有性や多様性を促すピアの復権は、そのまま人間らしさの再生につながるだろう。

ピア・ネットワークとともに、本書で強調されるのは「進歩主義」である。社会の活力や創造性を高めることによって、未来を切り拓いていく姿勢だ。大切なのは、私たちが見逃しやすいうゆるやかな進歩に着目すること。こうした進歩は、多くのひととびとによる「知の共同体」によって成し遂げられてきた。参加、平等、多様性を尊重するピア・ネットワークは、知の共同体や社会にいつそう活力をもたらささう。その勢力を、本書は「ピア進歩主義者<sup>プログレッシブ</sup>」と呼ぶ。

では、具体的にどのような変革&イノベーションが進んでいくのだろうか？ 本書はコミュニティ、ジャーナリズム、テクノロジ、インセンティブ、デモクラシー、企業などの各分野ごとに、豊富な具体例を挙げながら紹介していく。その動向を大きく括れば、幾つかのポイントが見てとれる。まず、「身近な生活領域（固有性）」への着目だ。従来の中央集権的システムは、社会の複雑さを削ぎ落とすことによって、意思決定などが進められてきた。そのため、私たちの生活に最も関わりの深い身近なできごとの情報流通や、地域コミュニティを改善していくことなどは、容易になされなかつたし、そうした声をすくい上げる仕組みも実現が難しかった。しかし、ピア・ネットワークの活用によって、住民自身がローカルな情報を受発信し、身近なコミュニティをより暮らしやすくしていけるようになってきている（そのプラットフォーム

としての「オープン311」や「ブリックスタター」など。

同様のことは政治においても、参加型デモクラシーというかたちで現れている。たとえば、「参加型予算編成」では、住民自身が市の予算の優先順位を決定できる（ブラジルのポルトアレグレ市で始まったこの試みは、今や世界各地の自治体へと広まっている）。また、選挙においては、委任投票により、自身の票を信頼できる代理投票者にゆだねるというアイデアが注目されている（『不思議の国のアリス』の作者ルイス・キャロルことチャールズ・ドジソンが発案）。政治のテーマごとに代理参加するという方式によつて、市民の参加を促すとともに、大きな政党政治から漏れ出てしまう民意をより反映させやすくなるわけだ。

また、「多様性・協働性・オープン性」の実現も、変革&イノベーションを進めるには欠かせない。多様な開かれた視点で協働したほうが、社会・組織としてもっと賢くなり、もっと革新的で柔軟に思考できるようになるからだ。ピア・ネットワークは、こうした多様性・協働性を高め、さまざまな問題を解決する能力を高めていく。ジャーナリズムにおいても、カバーできる範囲が広がり、その分析力や精度も上がっていく。また、このことは、まさに知財・アイデアを育み、イノベーションをもたらす枠組みともなる。具体的な方策として注目されるのは、ピア・ネットワークを基盤とする「懸賞コンテスト」である（Xブライズ財団の活動、米国政府が設けたChallenge.gov、教育関係の「レース・ツー・ザ・トップ」など）。これらのコンテストは多様な知を集めることができるだけでなく、その成果を特許などで囲い込まず、オープンにでき

る。そのことができますアイデアを流通させ、より改良させていくのだ。

企業の成長においても、ピア・ネットワークはきわめて重要になっていく。すでに、株主の利益だけではなく、関係する多くのステークホルダー（利害関係者）を尊重する企業が好業績を収めていることが明らかになっている。さらに画期的なのは、従業員が会社を所有する企業（株主のほとんどが従業員）である。こうした企業では、従業員一人あたりの生産性が高く、事業運営に従業員が積極的にかかわるほど収益性も高くなる（英国では従業員所有企業の増加を促す取り組みが発表された）。同様の改革は、学校でも起こせることを本書は提言している。

以上のような変革は、従来の市場や民主制を尊重しながらも、その弊害も目立ってきた今日、別のやり方を探る試みといえる。ネットワークの縁からの、つまり私たちのだれもが加わり、主役となる変革&イノベーション——ささやかな力がささやかな力のままに世界を変えていく。もちろん、まだまだこの仕組みやパワーは発展途上だ。だからこそ、立ち止まることはない。本書によって初めてその潜在力が全面開花する可能性が示されたピア・パワーを、私たちは、いまここから、試していけばよいのだ。

最後になったが、多様な領域にわたる本書を的確でわかりやすい訳に磨き上げてくださった田沢恭子さんに多大の感謝を！